

偶々歸省しつれば、たどしへなき、喜びのゑがほもて、  
 我れを迎へ給ひ、さて、出立たんとすれば、又來ん年  
 の歸省を、待つぞよと、繰り返し給ふ。なべて世の、  
 子もたらん、ほゞの母は、一時のまも、心のやすま  
 る事は、あらひとぞ覺ゆる、されどそれ中々に、樂み  
 の一ツに、かぞへ入るゝものぞ。此暖かなる母の心  
 の、限りなきを思へば、孝養を缺ける、我身の恐しさ  
 も身にしてみ、いづれの世にか、此厚恩を報い盡す事  
 を、得んとこそおもほゆれ。世の子女たち、心して、  
 ゆめ孝行をな、怠り給ひそ。

櫻ともみぢ

さくら

朝日にはふさくら花  
 そをはくくむは春霞かすみ  
 花より赤さもみぢばを  
 その織りなすは秋の霜しも

文苑 母のこゝろ 櫻ともみぢ 母と妹 春の山

さくらの如き頬ほのいろ  
 もみぢ色なる赤心まごころを  
 そをはくくむは誰ならん  
 染め織りなすは誰ならん

母と妹

小林つね

嬉しきものはうらくと  
 ひばりの歌をきながら  
 はなのたもとにあまる迄まで  
 かさべにまねく母ははきみの  
 心こころの春はるをあたゝかき。  
 かすむ春野にうちつれて  
 妹いもとたのしく母子はごくさ  
 つみて歸ればわがやゞの

春の山

東くめ

白妙しらたかの衣きぬ  
 薄紫うすむらさきの  
 たちかさねたる  
 ぬぎすて、  
 八重かすみ  
 山々の